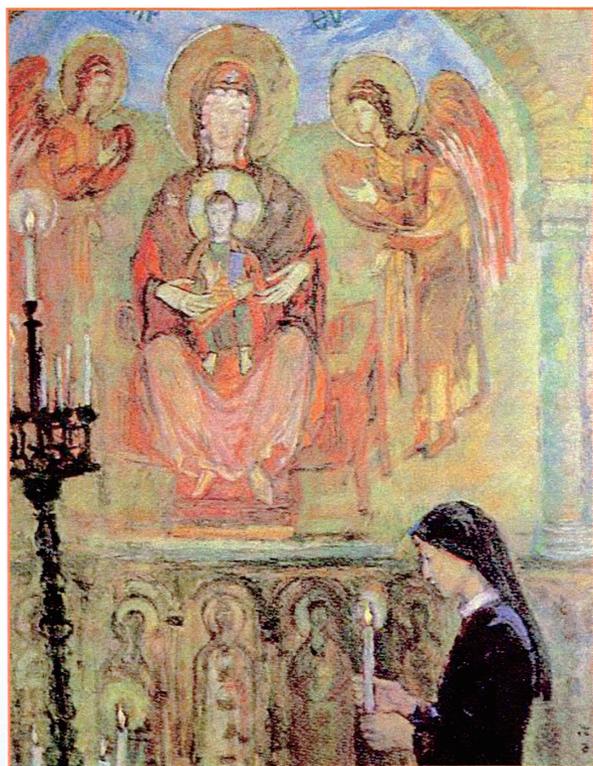


夢の郷 テレサの家

追憶断片



稲賀久美子

夢の郷 テレサの家

追憶断片

稲賀久美子

表紙写真：ばしりか

松本治子 「バシリカの一隅」油彩 広島・観音町教会・聖堂に寄進
ギリシア・テサロニア近郊、エアニ村に残る聖堂のフレスコ
絵画（11世紀）

はじめに

私共の母、稲賀久美子こと、2022年2月22日で恙無く91歳を迎えます。

また、本年は、父、稲賀敬二が没して、はやくも21年目となります。

この機会に、まことにささやかなものですが、家族の記録の一斑として、記念の文集を編むことといたしました。

久美子が活動に参画させて頂いた「テレサの家」の沿革に触れつつ、近年の心境を回想する連載の文章がありましたので、それをまとめ、ご縁に恵まれました皆さまに、感謝を込めて進呈申し上げる次第です。

この間の永年にわたるご友誼に、あらためて深謝申し上げます。

おかげさまで、母・久美子は、あいかわらず達者に、広島での日々、周囲からの温かい支えを頂き、健やかに日々の生活を営んでおります。ひとことご挨拶申し上げ、皆さまのご芳情への御礼といたします。

稲賀繁美・真理

1

「夢の郷・テレサの家」は広島県廿日市市津田にある。140坪の土地に約76坪の家（母屋と二階建ての納屋）と、水路沿いの少し離れた150坪の土地の総称である。

この辺りは、廿日市市に合併される前は佐伯郡佐伯町津田と呼ばれ、世界遺産の宮島が浮ぶ瀬戸内海の沿岸市街地（広島市・廿日市市など）から峠（明石峠）を一つ越えて登ってくる盆地である。盆地を取り囲む田圃が山々の麓まで見渡せる広々とした田圃の中の見晴らしのよい平地に建つ田舎屋。平屋建ての赤瓦の母屋は南面に玄関があり、入って右手に洋間が一つ、暖炉が切っただけである。奥に進む廊下の左手は、8畳と6畳2間の和室があって襖で仕切られ、襖を外せば広間に使える。奥の6畳間には床の間があり書院窓が付いている。南側に広縁があり、農作業を済ませた人たちが集まってお茶を飲みしばし寛ぐ場所、夏の夕涼みや秋のお祭りにも寄り合っただけと思われる典型的な農村の日本家屋である。

田圃を見渡す家の前の道に沿って小さな築山のある庭が作られ、西の隅に大きな柿の木が一本植えてある。初夏には柿若葉が田圃の早苗を背景に美しく眺められ、秋には沢山の実を付ける。渋柿だからそのままでは食べられないが、



鳥に狙われる前に収穫して干柿にする。
前庭の築山には芝ざくら、すゞらん、岩芝などの植物もあって楽しめる。

洋間の隣りは土間になっていて家の北側まで続き、井戸や竈^{かまど}の跡が残っていてこゝで煮炊きをしていたと思われる。居間として使ったものか、土間から上った所^{いろり}が爐を切った広い板の間で、裏口の戸があり、その西側が風呂場とトイレで、和室8畳間の北側に廊下をへだてて並んでいる。



更に、納屋として使ったと思われる土間の東側につながる建物は、南が開いていて荷車などの出入口にも使えようになっている。後から増築したらしい手作りの2階があって、土間から階段を上がると北側（左手）の奥に個室が2つある。突き当たりの10畳大の洋室はこの家の管理人の部屋として使い、その隣りの8畳洋間は西側の高い位置に小さな窓があるだけ、半分は宿泊に使う布団置場にしているが、窓の下にベッドを一つ置いて寝泊りも出来る。「独房」といううれしくない名をもらった困った部屋である。階段を上って右手に当たる南側の部屋は22.5畳大の広間になっていて、東西と南側に大きな窓があって明るい。皆で集まって話し合ったり、ゲームをして遊んだり出来る部屋である。

初秋の山里で初めてこの家に出会った時には思わずワーッと歓声を上げてしまった。JR山陽線の宮内串戸駅からバスで峠を越えて40分足らずと地の利もよく、家は広々として明るい理想的なものだった。新聞広告などをたよりにあちこち探し回り、山の中の廃校跡や山陰の方まで足を延ばして探し回った挙句に行き当たったものだったから、その喜びは大きかった。こゝを活動の拠点にふさわしい場所と見定めて、この家を手に入れたいと願った。

1989年4月25日、「全国カトリック・ボランティア連絡協議会広島グループ」という長々しい名前の会が発足した。ボラ連の廣岡洋子会長が

1988年11月14日に広島に来て下さり、約60名が集まってお話を伺った。この集会の際にアンケートをとったところ、各教会、各地域でも地道なボランティア活動を続けているグループがあることが分かり、同じ思いに生きる人たちが集まって互いに支え合い、励まし合いながら歩んでいこうという気運が高まった。各教会（広島の6つのカトリック教会）から代表者が集まって案を練り、実現への準備を重ねた。半年後、12名の代表が決まり各教会に呼びかけて会を発足することができた。ボランティア活動は仕事をするだけでなく、生き方として自分自身を成長させる。自分と同じように相手を知って大切に、共に生きていく友の心が必要だと痛感した。勉強しながら活動する、働きながら学ぼうというモットーに従って年10回の講座を計画した。月に一回定例会をもって講座の打ち合わせや準備を重ねるうちに、代表者同志親しみや共通の話題も増え、奉仕活動を誘い合い、協力し合って共に行うことが多くなった。そこから生まれた問題点を取り上げ、更に新しい企画を発展させていった。

ボランティア養成講座、カウンセリング講座を設けてボランティア精神を学ぶと同時に、次第に社会問題として取り上げられるようになってきた老人との関わり、野宿労働者や障害を持つ人たちとの交流など、実際の活動を開始した。車椅子体験、点字や手話の勉強も始めた。目の不自由な人との交流、手話教室は現在まで続いている。

1991年4月6・7日、全国カトリック・ボランティア連絡協議会総会の会場に広島の地が選ばれた。広島グループは発足して2年に満たない若い集まりだが、廣岡会長のバックアップをいたゞいて比較的順調に活動を続けていくことができた。会場になった廿日市カトリック教会は、広島の西部にあり、瀬戸内海を隔てて景勝の地安芸の宮島を臨むことができる。1989年12月3日に献堂された当時としては新しい聖堂で、多目



花の絵：矢口マリ子

的使用可能なホールとして創られている。こゝに全国からボランティア代表が集まって共に祈り、語り合っ盛況のうちに終えることができ、私たちにとって大きな喜びになった。

会も歩みを重ねて1994年、当時次第に問題化してきた不登校や引きこもりを取り上げ、1・2月のボランティア養成講座で「不登校の背景に見えるもの」と題して、カウンセラーの先生のお話を2回にわたって伺った。この講座の反響は大きく、親たちの関心は高かった。そこでアフターケアのような形で、月1回先生を囲んで親たちの話し合いの場、相談会を設けた。教会の一隅を借りた午後からの話し合いは話題が尽きず、晩鐘の鳴る頃まで続いた。鐘の音を聞いて出席者の中から「鐘は鳴る会」という名が生まれた。メンバーは変わったが現在まで20年余り続いている。

不登校の子を持つ親たちから、子どもたち同士の交流を求める声上がり、問題を抱える子どもたちが集まる会を、教会内で青少年情報センターの世話をされていたシスターの協力をいたゞいて、週1回開くことになった。中学、高校生などを中心に積極的に集まりに参加し、話し合いやゲームなどをして過ごすようになった。

青年たちの集まる「こころの窓」というグループがあった。1995年1月の地方新聞に載った「学齢期を過ぎた人たち同士のつながりを持ちたい」という記事をきっかけにスタートし、機関誌『こころの窓』を2ヶ月毎に発行、20名位のメンバーが原稿を持ち寄って（遠方からは送付）、



家の前は広々とした田圃が広がる。

編集し発行していた。メンバーの中にカウンセリングの先生の所に通っている者もあって、教会の一室で編集を行うようになった。週1回集まっていた子どもたちとの間に交流ができ、以前に廣岡さんから紹介されたフリースクール（カサ・リブレ）に倣って、自然発生的にフリースクールを持ちたいと思うようになっていった。

1999年1月から3回の準備会を経て、旧司教館跡の一部を借りて、行き場のない人たちが集まって過ごす場所フリースペース「もうひとつの自分の部屋」を開き、週1回一緒に過ごす憩いの場所を提供した。昼食を作って食べたり、お茶をしたり、テレビ、ビデオを観るのも、マンガを読んだり昼寝したりするのも自由ということで生まれた集まりで、名称を「こころの大部屋」と改め、口コミなど個人的な呼びかけで参加者数も増えていった。出会いから1年すぎた頃には、春のお花見、夏のキャンプ、秋の紅葉狩りなど自然の中で過したり、流星群を見に行ったり、フリーマーケットで一緒に働いたりと活動を重ねるうちに、市内から少し離れた自然の豊かな静かな所に、一緒に過せる家を持ちたいと願う気持ちが強くなった。

津田によい家を見付けて歓声を上げて喜んだ私たちは、早速購入の準備に入った。ボラ連定例会で何度も話し合いをもち、早い時期から候補地を探す動きは始まっていた。同時にその基金に充てるために、会合の度にミニバザー（家でお惣菜を作って来て売ったり、古着を引っ張り出して持って来たり）をしてこつこつ積立をした。ボラ連別会計をプールしたりと心掛けてはいたものの、宅地と家屋を買うのは大変なことだった。それでもこの機を逃してはならないと懸命に奔走する日々が続いた。

1999年9月20日購入申込みをし、手付金として150万円を用意した。購入費用は1,500万円。10年返済のローンを組み、プール金と協力者の寄付などを頼ることになる。11月1日決済日に登記を済ませる。やっとの思いで手に入れた物件だったが、少し離れた土地（現在テレサの畑と名付けて使っている）の購入と家屋の改装に手間がかかった。費用は約

200万円をプール金から充てた。

先ず屋根の手入れから始め、外側のガラス戸をサッシに変えた。和室の畳、襖、障子は全部やり替え、居間と土間の一部をつないで15畳大のLDKとして使えるように治し、ガス台を入れ、冷蔵庫を裏口を閉じてその前に据える。洗面所、浴室も改良し、トイレをウォシュレットに替え、もう一個倉庫の隣りに新しいトイレを作って裏口をそちらに移した。幸いよい工務店の人が力を貸してくださり、若い人たちが不自由なく使えるように改造がすすめられた。11月から改装に入った家屋は翌年2月末には大体形が整ってきた。家の中も人が住めるようにと家具など揃えていった。ダイニングキッチンに据える机と椅子を買い入れ、食器棚も買った。食器は沢山の寄付を頂いて、よい器が集まった。また布団類タオル類も寄付によって集まった。シーツやタオルケット、毛布などはなじみの布団屋さんから大量に手に入れた。こうして年末から年を越して何とか生活していけるような家に生まれ変わった。

初めてこの家に泊ったのは1月末の寒い夜だった。お風呂はまだ使えず近くの温泉ロッジにもらい湯に行った。雪の降る前の冷え込みで川沿いに吹き下ろす風は身を切るように冷たかった。朝には大雪になっていて、晴れた空の下雪景色が美しく眺められた。この盆地は市街地の北に当たる山の中にあり、市内との温度差は5℃以上もある。降雨量も多い所で、冬はよく雪になった。役場や農協などがあるメインのバス通りは、雪が積ってもすぐに消えるが、通りから脇道に入って家まで行く道は、なかなか雪が融けず車で出るのも大変な所だ。現在主な仕事になっている宅配は冬の季節、特に雪が積ると車の運転に苦労する。この活動については後に詳記することにしよう。

3月のボラ連定例会はこの家に集まって開いた。改装が殆ど済んだとはいえ家の中はまだ整っておらず、やりたい仕事は山のようにあった。「こころの窓」の青年たちも手伝いに来てくれ、カウンセリングの先生も様子を見に訪れて下さったが、その日は仕事を早目に片付けて午後は

例会に入った。4月1日にオープンを予定していたので、その準備の打ち合わせを優先させたのだ。この会合で「夢の郷・テレサの家」と命名することに決定した。

2

2000年4月1日「夢の郷・テレサの家」はオープンを迎えることになった。家の祝別とミサを廿日市教会の主任司祭にお願いし、そのあとさゝやかながらパーティを開くことが決った。これで私たちを支え、協力してきてくださった方々、ボランティア連絡協議会で他の活動をしている人たち、この家を立ち上げるために力を貸してくれた方々に案内状を出すことになった。

私ども「カトリックボランティア連絡協議会広島」の有志を中心としたグループは、数年前より「夢の郷」の設立を目指して構想を練って参りました。昨年11月初め、佐伯町の一角に、活動の拠点として中古の家を求め、実現に向けての一步を踏み出しました。皆様のお力添えのおかげで家の改装も終り、「祈り、憩い、そして働く」生活の場として活動を開始する日を迎えることができました。この喜びを共に分かち合いたく、さゝやかなお祝いの宴を開くことに致しました。

是非お出かけくださいますよう……。

そして、

日時：4月1日(土) 16:00~20:00

場所：「夢の郷・テレサの家」

番地と地図を添えて

プログラム：家の祝別、ミサ、スタッフによる経過報告、パーティ
(17:00~20:00)

と記して発送した。



お世話になった方々をお招きするには、家の内外を少しでもきれいに整えておきたい。それは、私たちこの家を使う者のためでもある。

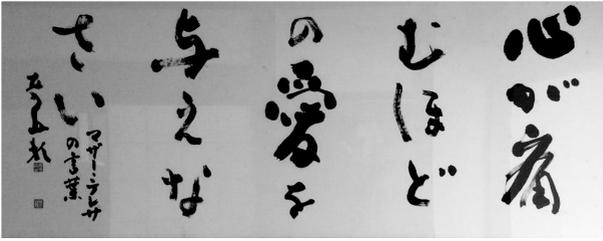
前庭と家の周辺をきれいにすることを、教会の造園業を営む方をお願いした。この方は広島内の二、三の教会の庭をきれいに手入れされ、樹木などは思い切って枝を切り下ろして短く刈り込み、清々しい空間を作り出すことで名を知られている。私たちの活動にも協賛していたとき、広島からテレサの家へ家具などを搬入した時には、営業用の大型トラックを提供して運ぶのを手伝ってくださっている。前庭の玄関先にある樅の木は、長年手入れをされていないため、天を指して高く聳え立ち、枝は伸び放題で葉は辺りが暗くなるほど茂っていた。先ずこの木をなんとかしなければと、高い枝を下ろしてきれいに刈り込んでくださり、すっきりした姿に生まれ変わった。隣りに生えている老いた松の木も枝を下ろしてもらい、辺りはすっかりさわやかな雰囲気になった。フリースペース「こころの大部屋」に来ている青年二人も手伝いに来てくれた。

大量に下ろした樅の木の枝は、折からの枝の主日（受難の主日）のミサの前に行進する道として、観音町教会の庭に敷き詰めて使われ、お役に立った。クリスマスにはツリーとしてきれいに飾り付けたら楽しいだろうと話し合った。東側の道沿いに溝のある空地には、ライラックやムクゲを植え、聖地から持ち帰ったというオリーブの木も二本植えた。裏



庭にはねむの木、椿、紫陽花など以前からあったものにも手を入れた。これで外回りは何とか形を整えることができた。

家の中央にある洋間は暖炉が切ってあった。初めてこの家を見た時から、こゝに祭壇を置き祈りの部屋と



いた。「案ずるより生むが易し」とはこのことかという感じで……。

この方は、プロテストタンの信者

さんだが、ミサの席にも出てくださり、パーティにも残って、心温まるお祝いの言葉や、私たちの今後に役立つ大切なお話を残してお帰りになった。玄関には今も短いスロープが置いてあるが、その後は一度も使われていない。

ご招待した方で、もう一人この家にとって大切な方がある。テレサの家の玄関を入った東側の壁に、マザー・テレサの言葉を書いた額が掲げられている。「心が痛むほどの愛を与えなさい」というものだ。

これは、マザー・テレサが修道会「神の愛の宣教者」のシスターたちに向けて言われた言葉だが、私たちが目指すマザーの教えて下さった「心の痛む愛」であり、マザーの生き方に倣って、その愛の実現を望んで創った『夢の郷・テレサの家』にもっともふさわしい言葉と言えよう。書道家、網本奇丘氏の揮毫で、この家のオープンを祝って贈ってくださったものだ。マザー・テレサの「愛」の文字が中心に輝いている素晴らしい額である。この家の大切な宝であるこの額の寄贈者に、オープンの席には是非参加していたゞきたいと願った。網本氏は、廿日市教会の信徒でテレサの家設立にも力を貸してくれた人の弟さんに当たられる。この夕べは姉上夫妻と一緒にオープンの宴に参加して下さり、私たちの心からの喜びをお伝えすることができた。

パーティの会場となった奥の六畳の床の間には、杜牧の漢詩「江南の春」の掛け軸が飾られた。これは、網本氏の母上が書かれた軸で、もうご高齢のためこれが最後の大作になると言われるが、実に美事な書である。季節にふさわしい詩でもあり、祝いの席に華を添えてくださった。

お二人の私たちに寄せていただいたご厚情は忘れがたく、この夕べの記念として心に残るものとなった。

オープンの日を記録した写真の中に忘れられない一人の友の姿がある。ボラ連発足当初から活躍



されていた祇園教会の人で、この日は一人で奥の座敷に陣取って、食卓の上一杯に食材やお皿を並べパーティのご馳走作りに余念がない。料理が得意でおいしいものを上手に沢山作られる。お招きした方々のために腕を振るって山のご馳走を作っているところだ。以前お正月休みの折に、ボラ連のスタッフが担当司祭と共に自宅に招かれて、お手料理をご馳走になったこともある。まるでレストランへ行ったように次々と出されるおいしいお料理の味を皆で楽しんだものだった。定例会の折にも、お惣菜のちょっとしたヒントをしばしば教えていた。

我が家にムッキーちゃんの名付けた柑橘類の皮剥きがあり、夏みかんなどの皮を剥くのにいつも重宝して使っている。彼女から貰った調理器具の一つである。レストランを運営していた友人が、その人がお店を閉められた際に、ナイフやフォーク、スプーンなどを貰い受けてテレサの家に寄付してくださった。そればかりか、レストランで使用していたガス台や大きな冷蔵庫までいたゞいて、車でテレサの家へ運んだ。作業場の奥に据えたガス台は使う機会がなく、今はダンボール置き場になってしまっているが、冷蔵庫は今やっている宅配の仕事の野菜保管のために大いに役立っている。

調理の他にも特技があった。園芸の名手で植物を育てる術に長けていた。お家の庭には何百種類もの樹木や草花を植え、実に上手に育ててい

た。配達の日などお宅に伺う度に、珍しい草木や美しい花々を見せていたゞくのが楽しみだった。植物への愛情が深く知識も豊富だった。こんな特技を沢山お持ちの上に、教会の仕事や聖書の勉強などにも熱心で、ボランティア活動も精力的にされた方だった。その又やさしい心遣いがあるって、お庭に咲いた花の美しい写真を皆に配ったりしてくださった。テレサの家には祭壇の横に飾ってあるし、我が家にもかわいらしい“紅山しゃくやく”の写真が置いてあり、「紅色は珍しいんですよ。」というコメントが添えられている。残念なことにガンを患って8年前に帰天された。今お元気で一緒に働いていれば、70歳を過ぎておられるから、少しずつ活動を整理していかれたとしても、ボラ連の中心として活躍されていたに違いない。短かいお付き合いながら、沢山のよいものを遺してくださった方だった。

もう一人、このオープンの日に忘れ難い大切な友がある。廿日市教会の方で、ボラ連発足の前から老人ホームのお手伝いや手話の勉強を一緒にしていたボランティア仲間だった。人の言うことを聞くのが上手で、不満やら問題になる出来事などを黙って聞いてくれる人だった。知り合ってからまだ間もない頃、私の教会内にいろいろな問題が起り、責任者の立場にあったためその対処の方法に悩んでいた。相談するというよりもたゞ愚痴を聞いてもらっていたゞけなのに、どんなに助かったか分からない。当時教会で始めたクッキーを売るボランティアの仕事が行き詰まってしまった時には、廿日市教会で引き継いでこの仕事が続けられるように助けてくれたものだった。使っていた「野のゆり会」という名もそのまま受け継いでくれ、折角始めたよい活動も、気に入っていた名前も失くならないで済んだ。今行っている NPO 法人の活動の一つ、「暮らしを考える野のゆり会」の名もこの時の引き継ぎで残ったものである。

まだ「夢の郷・テレサの家」の構想が具体化していない前に56歳という若さで膵臓ガンのため亡くなられた。共にこの家を創り、オープンの

3

2000年4月1日「夢の郷・テレサの家」は、設立に協力して下さった方々をお招きして、オープンのみさとお祝いのパーティーを無事に終わることができた。参加者は24名、「こころの大部屋（フリースペース）」のメンバー5名、ボラ連（カトリックボランティア協議会）からは9名が加わった。その夜は11名がテレサの家に泊まった。母屋の畳の部屋に女性たちが泊まり、男性陣は別棟の二階の広間に泊まった。一夜明かした朝は、どの人の顔も昨日のオープン行事を無事に済ませた安堵感と、これからここで過ごす生活への期待とで輝いて見えた。女性たちの泊まった母屋の方はきれいに整理されていて宿泊にもあまり不自由はなかったが、仕事場として使う別棟の二階はまだ手入れが必要だった。オープン第一日目の作業として、昨夜そこに泊まった男性たちを中心に、広間のカーペットの清掃と階段の敷物洗い、棚作りなどを行った。以前にいただいて階下に置いてあった本箱を二階に移し、壁に松本治子さんの絵「躑躅（つつじ）の丘」（広島学院に登る古江の山道）を飾って、皆で過ごせる部屋らしく整えた。階下の作業場にも、3月初めにレストランから譲り受けたガステーブル、冷蔵庫、製氷機などをきれいにする仕事が残っていた。皆で精いっぱい最初の作業を仕立て満足のうち解散した。

「夢の郷・テレサの家」で私たちが目標とする活動内容は、第一に居場所のない人に憩いと安らぎの場を提供すること、いわば「駆け込み寺（宿）」の役目を果たすことである。森一弘司教様のお言葉“限りなく優しい神の愛の中にすべての人間にとって生きるための根本的な居場所、よりどころがあることを示し続けること”に倣って、私たちも必要とする人にはいつでも門戸を開いておきたいと思う。オープン以来ここで過

●.....

ごした人は、中学生をはじめ、赤ちゃんを連れた人、引きこもりの子どもを抱えるお母さん、家に居場所がなくて逃げてきた主婦、住む家を失ってしまった人など、それは多くの人を受け入れてきた。このことについては次回に書きたい。

第二に「暮らしを考える野のゆり会」の仕事を挙げることができる。これは以前から仲間内でしていたことの継続のような形で始めたものである。また滋賀県の大萩茗荷（みょうが）村（ハンディを持つ人たちと共に家族として暮らし、自然の中で自給自足を目指して生活する人々の作っている村）で「暮らしを考える会」という活動を続けている友人に、よい業者を紹介してもらい販売の方法なども教わりながら行っていたものだ。月一回、昔ながらのこだわり製品の調味料や乾物など安心して使っただけの食品、体にやさしい日用品などを吟味して注文書を作り、協力者の方（現在は180名に達し、そのうち月平均80人くらいが常時利用して下さっている）にお配りする。期日内に注文していただき、中旬ごろ集計して必要なものを業者に発注し、届いた商品を月末に注文に応じて仕分けして宅配または宅急便でお届けする。

扱う商品として、例えばパンは佐伯町玖島（くじま）にある作業所“夢工房”というパン屋さんで山水を使って作る無添加のもの、豚肉は徳島県のウイナークラブから生後100日以後は抗生物質を与えず、飼料の安全にも気を配っている生産から出荷までの短いものを取り寄せる。野菜は近くの農家の畑で無農薬で作られたもの、長崎県のグリーン長崎産直センター、高知県の高生連、熊本県の九州有機の里などから、できるだけ農薬を抑えて有機肥料で作られたものを送っていただく。テレサの畑で青年たちが作ったものも加える。調味料は三重県の福岡醤油店の昔ながらの製法を頑なに守って作られた“はさめず”（これは調味料ではなく副食物として作ったものだが、箸でははさめないためにこう名付けたという）。黒酢は鹿児島県のあまん壺（つぼ）で作られたもの、完全天日塩は高知県で海水を汲み上げて天日で乾燥させた製法、日本の中でもその

方法は数ヶ所にしか残っていないという。

その他の食品にも注文書に説明欄を設けて各々の特徴を紹介している。

日用品として石鹸、シャンプー、クリーム、歯磨きなどは、消費者の希望で直接業者に頼んで作ってもらったものや、実際にスタッフの間で使用してみて体にやさしい有益なものを扱うようにしている。商品数は次第が増えて、現在では245種（食品類が230種前後、日用品は季節によって変わるが大体15種類くらいを扱っている。）にもなってしまったが、当初はもっと少なかった。

「こころの大部屋」に集まっている人たちは、引きこもりや居場所のない人、他者との交わりの苦手な男性が多く、年齢も20代後半で殆んどの人が車を運転することができた。車を使って注文の品を宅配することを通して他者と接する機会を得、スタッフと一緒に働きながら少しずつでも社会に出ていく足掛かりになればと願ってこの仕事を選んだ。

月一回行うこの仕事のために、3週目に集まった注文書の集計と業者への発注、4週目は発注した商品を受け取って注文に従って仕分けし、翌日の午後配達に出る。その間に次の月の注文書作りもする。泊り込みで仕事をするので夕食後など皆で話し合う時間も持てる。楽しい交流の時にしたいと思うのだが、大方は仕事の打ち合わせや問題点についての話し合いに終わってしまう。仕分けの時に商品が足りなかったり余ってしまうことも多く、原因を見つけるのに時間がかかり、時には徹夜に近い重労働になることもあった。翌日の運転のために睡眠をとる必要もあって配達時間は午後になる。お届け先の家を探して道に迷ったり、夜まで仕事が終わらないことも度々だった。

青年たちの社会復帰を願って始めた仕事だったが、唯一の収入源として「テレサの家」の維持のために役立つことにもなった。家のローン返済はかなりの負担になったものの、寄付などを頼りに支払っていき、10年に満たないうちに全額返済することができた。家の生活を支える公共料金（電気、プロパンガス、水道、電話、NHK など）は何とか賄うことが

可能で家の維持には特に問題はなかったが、月々の仕事日の食費や日用品、燃料費やガソリン代など自己負担もしなければならず、アルバイト代も思うように渡せない状態だった。

働く人は青年たちが3、4人、ボランティアで手伝ってくれる人が2、3人、それにスタッフが2名と10名に満たない人数だったが、月一回皆で集まって失敗を繰り返しながらも何とか続けることができた。今ではNPO法人の活動の一環として、パソコンを使って仕事もスムーズに運ぶようになっている。

「テレサの家」での仕事は、相手の立場を理解し互いに尊重し合って自主的に行うこと、祈りに支えられて、マザー・テレサの痛む愛の実践に努めること、豊かな自然に囲まれた中で互いに持っている力を出し合って、仕事を積み重ねていくことなどを目指している。共同作業だから力の違いには問題もある。しかし、能率的ではないが無理のない方法をとることで、次第に親しみが増し気持ちよく仕事を進めていくことができる——そんなことも少しずつ学んでいった。

4



「夢の郷・テレサの家」はフリースペース「こころの大部屋」に集まる人たちと、自然の豊かな環境の中で“祈り、憩い、そして働く”をモットーとして、静かに過ごす生活の場を目指して創られた。フリースペースが始まった頃には、学校生活や友人関係に悩む人たち、家族の愛に恵まれない子どもたちなど学齢期にある人が多かった。時を経て次第に社会生活になじめない人や心に悩みを抱く人など、対象が大人の世界に移ってきていた。その他にも、春秋などのよい季節には自然に囲まれた景色を楽しむことができ、教会の人がグループで訪問して下さったり、修道会のシスター方に黙想の場として使っていただくことも度々あった。夏には教会学校のキャンプとして合宿場に、また平和学習で広島を訪ねる人たちの宿泊場としても活用された。近頃はお盆休みに身内の方々が集まって過ごす場所になるなど、いろいろな目的で使っている。

夏のキャンプ場としてこの家を初めて使ってくれた教会学校の人たちは、街中から離れた広い自然の中で過ごす解放感もあって、夕食を済ませたダイニングキッチンで大騒ぎして過ごしていた。暑い夏のことでガラス窓は全部開け放してある。この部屋は隣家の前庭を隔てて間近な所にある。皆で盛り上がっていた最中に突然裏窓がノックされ、外を見ると真っ青な顔をした隣家の主人が立っていた。「この家は信仰のある教会の人が使うと聞いているが、夜中に騒いで人の家に迷惑をかけるとは何事だ。」と震える声で文句を言われた。平常は静かな山里なのにこの騒ぎで眠れなかったのだろう。神父様も交えた団体でスタッフも一人同伴していたのに気付かなかった。驚いて恐縮し平謝りに謝まったという。

以後夜にこの家を使う時は、北側のダイニングキッチンは早目に引き上げて、南側の縁側のある和室や折りの部屋を使うよう心掛けるようになった。それでも青年たちが集まると、畑仕事を済ませて夕食が終った後は皆でギターに合わせて歌ったり、歓談したりしながら夏の夜を楽しむことも多かった。

「テレサの家」には通常ここの管理をする人を置きたいと考えていた。活動日以外は無人にして置くというのは問題であり、ご近所の人たちとの交流にも支障があった。近隣には昔から農業を営む土地の方が多く、私たちのような新参者はよそ者のような目でみられがちだった。折角手に入れた理想的な土地に早くなじみたいという気持ちが強かった。フリースペース「こころの大部屋」に開設当初から関わって一緒に歩んできた青年たちの中に、比較的年長者でここでの暮らしを望んでいる人があった。『こころの窓』にも執筆者として何回かよい文章を載せていた。一緒に仕事をしている中で万事委せて安心できる人でもあったので最適な管理人と考えた。彼自身もその気があったようで自分用の寝具を運び込んだり、車とは別に家の近くの移動に使う自転車まで持って来ていた。

しかし、ここに集まる人たちに共通な悩みとして深い心の闇をもっているからだろうか。なかなか自分の生活を変えることができず家を出ることができなかった。毎月「暮らしを考える野のゆり会」の仕事のために廿日市市内にある自分の家



後方左端が稲賀久美子さん

から登って来て、一緒に仕事をし配達も自分の車を使って周っていた。

月末の配達の人に一緒に乗せてもらいながら、「何時からこちらに住むの」と聞くと「来月には来ます」とすぐにも移転するつもりでいるように答えながら、なかなか住み込むことができずに過ぎてしまう。ここに住むために必要と思われる働き口を近所で見付け、就職の話が進んで最後に面接となると、行けなくなってしまい駄目になる。後に私がこの家で生活するようになった時、広島への用事を頼むと気持ちよく引き受けてはくれるものの、約束の時間に現れず長く待たされることがあった。「来られない時はちょっと電話でもしてくれたら」と何気なく言った答えは「電話ができるくらいなら来ています」というものだった。自分を変えたいと望みながら変えられずに囚われてしまう心の傷の深さを思い知らされてハッとしたものだった。結局管理人として住むことは見送られ、一年余りは空き家のままで仕事の時だけ使うことになっていた。

テレサの家に初めて住んだのは、30歳代の長崎出身の男性だった。学齢期までは長崎の親の家で育ち、教会に通って侍者なども務め教会の中でも活躍していたというが、成人してからは家を離れて各地を放浪したあと安曇野に住んでいた。『こころの窓』の投稿者として青年たちとも親交があった。広島に住みたいという希望を聞いてテレサの家を提供しようという話が進んだ。2001年7月中旬から住むことになり二階の管理人室に移転してきた。近くに働く場所を見付けて毎日通勤しながら、仕事が済むとテレサの家に帰って畑の面倒も見てくれた。当時畑はまだ手に入れたばかりで、土作りのために青年たちが近くの牛舎で牛糞をもらってきて播いたりしながら、少しずつ作物を作っていた。ハーブ園にしたい思いもあったようだが、さつま芋などを植えて育てていた。植えた苗の水やりなどこまめにしてくれた。本もよく読み『こころの窓』の原稿書きをする他に、絵を描く趣味があって近所の写生に出たり、二階の広間の隅にキャンバスを据えて大きな油彩の絵を描いたりしていた。フランスに絵の勉強に行くのが夢だと話していた。万事に積極的で活動家

だったが、勤め先の女性を連れてきたりして過ごし、この家にふさわしい住人とは言い難かった。

半年程経った頃、通勤途中で自動車事故を起こした。相手がよくなったこともあって事故処理が長引き、勤め先での失敗などもからんで今までの仕事は辞めてしまった。その後は情報誌を頼りにあれこれと職を変えて過ごした。配達の仕事で山陰方面までパンを運んだり、スーパーに花束を作って届けるような仕事もしていた。夜中の2時頃に家を出て冬の雪道を難儀しながら中国山地を越えたこともあった。しかしどの仕事も長続きせず、翌年3月末に広島市内の大きな会社の寮に入ると言ってテレサの家を出たまま、結局は行方不明となって連絡も取れずに終わってしまった。一カ所で腰を据えて仕事をするのが苦手な、放浪癖のある人だったのだろう。

2001年8月から翌年の4月末までの約8ヵ月間、私はテレサの家にお世話になった。8月の暑い日に壊れかけた広島の我が家を発って、必要な日常の手回り品だけ持って車でテレサの家まで送っていただいた。その春3月末に広島を襲った芸予地震で40年近く住んだ家が半壊以上の被害を受け、4月初めに47年間連れ添った夫を癌で亡くした。家は人の住めない状態で取り壊さなければならず、一緒に長年暮らした夫も失なって抜けがらのようになってしまった。眠れぬ夜が続き体重が7kgも減って、教会へ行くバス停までの道が揺れてちゃんと歩けず、教会の友人たちに大変心配をかけた。居場所のない人たちのために創った家だったが、文字通り住む家を失くしてしまった私が利用者の第一号になったわけである。一階北側の六畳の和室に落ち着き、別棟の二階に住む男性と8ヵ月間一緒に過ごした。生活は全く別々だったが、下宿のおばさんのように夕食を作ったり、通勤用のお弁当も作って持たせたりした。勤め帰りの人と一緒に畑の世話をしたり、夕食後は祈りの部屋の書棚から絵画の図録を持ち出して絵の話をしたこともあった。何もかも失って失意の中に過ごす私にとって、この人が居てくれたことは慰めにもなったよ

うである。

またテレサの家に上る途中に廿日市教会の信徒であるご夫妻がおいでになり、一人でさびしく過ごしている私を心配してしばしば訪れてくださった。奥様とはボランティアの活動を通して親しくしていただいていたが、車の運転をされるご主人と一緒に愛犬クロちゃんを車に乗せて様子を見に来て下さり、畑仕事も手伝っていただいてどんなに慰められたか知れなかった。



5

「夢の郷・テレサの家」がオープンして一年目の2001年8月から翌年の4月末までの約8ヵ月間、私はここにお世話になった。その春47年連れ添った夫を亡くし、芸予地震で40年近く住んだ家が半壊以上の被害を受けて取り壊さなければならなくなり、夫も家も一度に失なって居場所がなくなってしまったからである。居場所のない人たちのために創った家だったが、前章末でも触れたように、文字通り住む家を失くしてしまった私が利用者の第一号としてお世話になることになったのである。

夫は、亡くなる前年の頃から体の変調を感じていたようだったが、勤め先の大学の仕事はきちんと続け、自分の研究もこなしていた。この年の夏は酷暑の日々だったが、何かに憑かれたように仕事に打ち込んでいた。自分の余命が短いことに予感めいたものがあったのかも知れない。貧血がひどくて周囲の者が心配したにもかかわらず、検診も受けずに過ごしていた。

2000年10月5日に鳥取県西部地震が起こった。夫の故郷は境港市で昭和初期に父が建てた古い家が残っていた。地震で半壊してしまい市から危険建物の指定を受けて取り壊すことになった。家に残していた物の整



理のため病をおして出掛けた。庭の空地にプレハブの小屋を建てて必要なものを移動した。三泊四日で帰宅したが、思うように食事も出来ず、つらい日々を過ごしたようだった。もうどうしても検診を受けなければと本人もやっとその気になった11月中旬、検査結果は胃ガンで絶望的なものだった。年が越せるかどうかと危ぶまれる病状だったが、幸いよいお医者様に恵まれて輸血入院し、手術も受けて口から食物が少しずつ食べられるようになり元気回復するかに見えた。しかし手術後肩の痛みが出て頸椎への転移が判明した。3月初めに退院して自宅療養を続けた。杖を頼りに家の中の用はすべて自分で済ませ、重病とは思えない明るさで健気な闘病生活を送っていた。

3月下旬の芸予地震で家の屋根などに被害を受けた頃から、少しずつ気力の衰えが感じられるようになり、寝たきりの日々が多くなった。なんとか4月を迎えることができたが、10日余り経った日の朝から病状が悪化した。最期は少し苦しんだが、迫ってくる死を怖れず自分から進んで、開かれた明るい世界に向かっていくような気配を遺して亡くなった。天に召されるという言葉通り、希望のある安らぎを遺してくれたような死だった。

亡くなった後の行事や後始末に追われて、地震で壊れかけた家の片づけは5月に入ってからやっと手をつけた。区役所から係りの人が調査に来てくれ、家の下の地面に亀裂が入って土台が五カ所も壊れてしまった



ことが分かった。半壊以上の被害を受けており、人が住めない状態を取り壊すことが決まった。

建て直すまでの間、住むところもなくどうしたものかと迷っていた時、一緒にテレサの家を創った友人が、家が出来るまでテレサの家に住んだらよいと申し出てくださった。夫は大学に勤める日本文学専攻の学者だったので、膨大な量の本を遺していた。古い写本や版本など価値のあるものは大学に寄贈したが、他の活字本は運送屋さんの倉庫を借りて、家が出来るまで預かってもらうことにした。家財道具などの一切は、その友人が預かってくださり、身一つでテレサの家に移り住むことになった。

広島の家の後始末は息子と夫のお弟子さんになるご夫妻に任せて、一人峠道を越えて車で送っていただいた。夫の亡くなる前から眠れぬ夜が続いて体重が7キロも減ってしまい、身も心もボロボロの状態だったが、教会の人たちやスタッフに支えられて、何とかこの家に落ち着くことができた。長年住み慣れた家を後にした時、自然に涙があふれ出した。送って下さった友人から「初めて泣いたね。」と言われた。泣く余裕もない日々だったのだろう。一階北側の六畳和室を自分の住む所として、階下の部屋などは自由に使ってよいということになった。

この夏も前年に続いて暑い夏だった。テレサの家のある廿日市の津田は山に囲まれた盆地で、昼間の暑さは変わらないが、広島のような夕風がないので夕方からはすっかり涼しくなる。夜の時間が楽になりやっと眠れるようになって、少しずつ落ち着いた気分になれた。教会でお世話になっている友人が心配して、一家揃って訪ねてきて下さった。初めての訪問で家の場所が分からず、運転される息子さんから電話が掛ってきた。車の位置を聞いてみると、何と家のすぐ脇の道で手を振れば見えるところまで来ておられた。電話の子機を持ったまま家を飛び出して迎えた。初めての訪問客は有り難く、とても嬉しかった。おみやげのスイカがのどの渇きを止めてくれ、久しぶりに楽しい会話ができ、一人でないことをしみじみ感じたひと時だった。

長かった夏の暑さも次第に収まり、やがて秋を迎えた山里の風景はとても美しかった。辺りの山の紅葉が家に籠っていた私を外に誘い出してくれ、稲刈りの済んだ家の周りの広い田の畦道を歩きながら自然の美しさを満喫した。庭に咲き乱れたコスモスの花のやさしい色にも慰められた。さびしさや悲しみの消えることはなかったが、次第にこの家の生活にも慣れてきて、穏やかな気分で過ごせるようになった。10月7日、近くにある重度障害授産施設のバザーに近所に住む友人が誘ってくださった。この友人とは以前からボランティアで施設訪問し仕事の手伝いをしていた。外に出られない私を気遣って声をかけて下さったのだ。ご主人と一緒に愛犬を連れてしばしば訪れて下さっていたが、バザーでは久しぶりに大勢の人の中で賑やかに過ごすことができた。秋も深まっていったが、幸い小春日和に恵まれて、過ごし易い日が続いた。松本たかしの「玉の如き小春日和を授かりし」という名句を思い出し、豊かな心持ちで過ごした。庭の柿の木は沢山の^{からす}実がなって、赤く色づくのを楽しみにしていたが、鳥が集まってきてたちまち全部食い荒らしてしまった。梢に止まって鳴くアホーアホーという声が、馬鹿にされているようで腹立たしかった。

そんな生活の中で最も心の支えになったのは、テレサの家創りに協力して下さったシスターが、ご自分で作られたCDのお祈りの歌を贈って下さったことだった。美しい澄んだ声で歌われるお祈りを一日中繰り返し聞きながら過ごした。また、修練院の黙想会でご指導いただいた神父様に、身辺のことや感じたことを書いて度々お送りした。その度に美しい絵葉書の短いお返事を頂くことができ、少しずつ心の整理がついて、今後の一人で生きる道を考えられるようになっていった。もう一つ大きな心の支えになったのは、11月に出した夫の喪中葉書（年賀状を毎年千人を超す方々からいただいていた）の反響が大きく、思いがけない方々からお見舞いをいただいたことだった。既に4月11日の夫の帰天を知ってられる方からは、一人住まいの私の元を訪ねて下さったりお悔み状を

●.....

いただいたりしていたが、遠方に住む方や昔親しくしていただいた方々からも、お心のこもったお便りを寄せていただき、地方の名産を贈って下さったりして、なつかしい方々の対応にさびしさも忘れてしまうような年末だった。

テレサの家の冬は厳しいものだった。夏は涼しかった北側の部屋が冬には北極のような冷たさで、南側の日当たりのよい祭壇のある祈りの部屋に居を移し、冬の寒さをしのいだ。御聖堂で寝るようで気がひけて、はばかりされる気分だったが、この部屋が唯一温かく過ごせるところなので、一日中暮らす部屋になってしまった。広島より5℃以上も低温の日が続き、雪にも見舞われた。遠くの大学に勤めていた息子が冬休みに戻ってきてこの家に泊まった。新年の二日に大雪が降り、朝は一面の銀世界、広い田圃も遠くの家々も庭の築山も雪に埋もれていた。庭一面に積もった雪に息子が足跡をつけて歩き回った。前年父を亡くし、育った家も失ってさびしい思いをしている筈の息子が、子どものようにはしゃいで過ごす姿に涙を誘われた。

6

「夢の郷・テレサの家」の冬の寒さは厳しいものだったが、やっと春を迎えることができ、庭隅の水仙が一斉に花開いて冷たい前庭を明るく彩り始めた。広島の家から鉢植で運んできたヒマラヤユキワリソウも花を付けた。近くに住む友人と芽を出し始めた雑草を抜きながら、春を告げる青空のかけらのようなイヌフグリの花やハハコグサ、コマクサなど、春を待って咲き出した小さな身近に親しめる花たちの名を覚えていった。玄関脇の桜の蕾もふくらみ始めて、この家のオープンの際に味わった、希望に満ちた心が蘇ってくるのを感じた。テレサの家で過ごした八ヶ月はあっという間に過ぎてしまったようでもあるが、内容の深い大切な日々でもあった。満身創痍で抜け殻のようになってしまった身を温かく包んでくれるものがこの家にはあった。傷ついた心を映しとり受け入れてくれる不思議な力が感じられ、それが癒しとなって支えてくれた。

テレサの家には色々な事情で身を寄せて過ごした人が沢山ある。その中には同じように癒しをいただいた人もあるのではないか。二、三例を挙げてみよう。

2002年6月、高校生の男女がここに泊まった。フリースペース（こころの大部屋）に生活福祉専門学校先生から、“生徒の一人が家出しているのだから心当たりはないか”と問い合わせの電話があった。その直後に男子生徒から電話が掛かり、“フリ



ースペースに行ってもよいか。”と言う。待っていると女友達と二人で自転車に乗ってやって来た。昼過ぎの暑い陽射しの中を汗びっしょりになって40分かかって来たという。“よく来たね”と迎えると“ここしか来る所がないもん”と言う。夜も殆んど寝ておらず、水以外何も口にしていないとのこと。先ず食事をさせると自分たちのことを話し始めた。金曜日に二人で家出し、土曜日に一旦帰宅したが、月曜日にまた家を出て友人の知り合いの所に泊まった。火曜日はフリースペースの日なので自転車を借りて二人で来たと言う。泊まった所的人是親切で“ここにおれや”と言ってくれたが、家には網戸がなく戸も開けっ放しで住人のいびきがひどくてとても眠れない。酒や煙草をのむので居心地がすこぶる悪い。食べる物は全くないが、外は警察が自分たちを探していると思ひ込んでるので出ることもできない。

男子生徒は、中学のころからいじめがあって学校のことで悩み、高校に入って留年した。何とか頑張って登校しても頑張りすぎて疲れてしまう。もう限界だと言ってフリースペースに来るようになった。家では父親から“もう悩みなど何も言うな”と言われたのがショックで、父親とは話も殆んどできず、会いたくなくて家に帰れないと言う。女子生徒の方も父親の虐待が家出の理由で、命令的な物言いや暴力を振るわれることに堪えられないようだ。

連絡を受けてフリースペースに迎えに来られた二人の先生には、初めは会いたくないと拒否的な態度だったが、やがて勇気を出して玄関に出て行き、話をする。先生は“この後どうするんや”とか“家の人心配してるで”などと言われた後、“もう高校生だから学校がそんなに嫌なら、他に何か自分のしたいことをする方法を考えたらよい”と言われる。二人は自分たちのことが理解してもらえないと反発して、部屋に戻って泣き出してしまふ。スタッフが集まって、家出をした二人をどう扱うか別室で話し合う。

とても家に戻るのは無理なようなので、二人をテレサの家で預かるこ

とに決め、先生を通して家の人の了解をいただく。スタッフ二人が付き添って車で約50分かけてテレサの家に夜になって着く。ダニか何かにさされて体中がかゆいというので、先ずお風呂にに入れて体をきれいに洗う。着ている物も洗濯する。ここで過ごす目的として、食事をちゃんとしてよく眠り、気分よく体を元気にすることに重点を置いた。

次の日の朝、男子生徒は疲れて体がだるいと寝坊し、今日は何も考えずゲームなどして皆で過ごしたいと言う。女子生徒の方は昼過ぎまでビデオを見たりカラオケをしたりと一人遊びを楽しんでいたが、昼食後は皆でトランプをして過ごす。父親からフリースペースに電話が入っても出ようとせず、全く受け付ける様子がない。家出の原因を確かめたいと思い、話しかけたが、自分がテレビを見ている時に父親が命令的に仕事をさせようとするのが嫌だと言うばかりで、本当に虐待をうけているのかどうかは分からない。テレサの家に着いてからの行動を見ても、17才になる少女としては余りにも幼なすぎる感じがあって、気になった。男子生徒は、自分の抱える問題を一緒に考え感じてもらいたいと思っているようだが、彼女は目の前にある楽しみに熱中してしまい、彼の方には見向きもしない。彼はそのことに不満をつのらせてイライラしている。しかし彼女がしんどい時は傍らにいてあげるという約束があるらしく、女の子を一人にして置くのが心配で、守ろうとせずと一緒にいたとも考えられた。彼はテレサの家から家に電話を掛け続ける。母親の声が聞きたくなかったのだと言う。そして自分はおばあちゃんの家に行って一ヶ月位ゆっくり考えたいと言う。6時半頃母親から連絡があり、おばあちゃんの家で預かってもらえることに決まり、彼女も同じ所で引き受けて貰うことになった。その後テレサの家を出てフリースペースに戻り、広島駅まで二人を送って別れた。

現在、彼はもうすっかり大人になって、持病の為に無理はできないが、自分に合った仕事を見つけて自立して生活している。彼女のことは何も話さないで分からない。

同じ2002年に親に許されない赤ちゃんを産んだ女性がしばらく滞在した。5月5日近所の産院で女兒を出産したという知らせがスタッフの一人に入った。——何度か処置しようかと考え産院の前まで行ったがとても出来ず、赤ちゃんがお腹の中で動いたりすると可愛さがつり、一人でも出産しようと決心した。母親には冬の頃に打ち明けた。フリースペースにはクリスマス



会の後は、お腹が目立ち始めたので来なくなった。スタッフには相談していたが、皆に話せないことを申し訳なく思っていたという。産む前にはすぐに里子に出そうと考え、難産だったこともあったが、産後おっぱいを飲ませて世話をするうちに可愛さが増し、自分で育てたい気持ちが強くなってきた。里子に出した後、自分は何もなかったかのように生きてそれでよいのかと思ひ悩む。

児童相談所の人にも産院に来て頂いて相談する。自分で育てようと思うなら生活保護など色々な方法があると聞いた。母親は出産と子育ては認めていた。スタッフ二人が病院を訪問して泣きながら話す彼女の話を聞いて慰め励ました。とりあえず一旦家に赤ちゃんを連れて帰り、父親に話そうと決心していた。父親は全く気付いておらず、電話で打ち明けた時は驚き、病院には見に来てくれなかったが、母親と家に戻った姿を見て、“まあ落ち着くまでおれや”と言った。母親は沐浴を手伝ってくれ、笑顔があったので嬉しかったという。母乳は本人が薬を飲んでいるので止めて人工乳に切り替えた。

近くに嫁いだ姉がいて、父親と母親のした事を非難して大喧嘩となっ

た。母親がすっかり落ち込んでしまったこともあって家にいられなくなり、赤ちゃんを連れてテレサの家に来た——。一週間程の短い滞在だったが、この家で赤ちゃんと過ごす間に、自分の身に起こった数々の体験や問題を静かに反省する時間が与えられ、一人で子どもを育てる気持ちが固まってきたようだった。母子家庭といえただでも大変なのに、複雑な事情を抱え沢山の問題をもって生活するのは並大抵のことではない。何か起ると悩み、問題を抱えてフリースペースに顔を出して相談した。周囲の人々の理解や援助がなかったら挫折してしまったかも知れないが、幸い救いの手も差し伸べられて、何とか過ごしていけるようになった。赤ちゃんだった娘も今は中学生になっている。二人の幸せを祈らずにはいられない。

7

1994年に発足した「鐘は鳴る会」は、不登校や引きこもりの子どもを持つ親たちが、月一回カウンセラーの先生を囲んで話し合う相談会だが、発足当初は不登校の子どもの相談が多く、子どもたち同士も集まって過ごすようになって、その子たちを中心にフリースペースが生まれた。その後次第に学齢期を過ぎた人たちの親が相談に集まるようになり、相談内容も直接家庭に関する問題や社会的な事情も加わって扱われるようになっていった。引きこもりの人がいる家庭では、その影響が大きく、家庭生活がまともにできなくなってしまうことが多い。例えば過剰な潔癖症で外から家に入る前に必ず手を洗わないと気が済まない息子のために、親も出入りの度に手洗いを強いられたり、長い日本刀のような刀を持って家中を歩き回り出会うと切り付けたり、大きな犬を家の中で飼って家族が居場所を取られてしまったり、もっとひどいのは家に火をつけて燃やしてしまおうとするなど、困った例が沢山持ち込まれた。その都度カウンセラーの先生を中心に適切な対処法が考えられた。娘の自死によって家に居られなくなった母親を、しばらくテレサの家で預かって過ごしてもらったこともあった。

2005年頃のある土曜日の午下がり、「鐘は鳴る会」の集まりで十余名の母親たちが話し合いをしていた。そこへ母娘二人連れが、教会のシスターから教えられたと言って入って来た。二人とも疲れ切っている様子で、誰かに支えてもらわなければ立っているのもつ



らそうに見えた。室内は一時シーンとなったが、すぐにスタッフが立って行って新参の二人を受け入れた。事情を聞いてみると、二人は広島市内から少し離れた所に住んでいて、差し迫って生活に追われているわけではないが、生きる依り所を失くしてしまっているようで、教会に行けば何か助けになるものが与えられるのではないかと、フラッシュと門から入って来たところを、丁度通りかかったシスターに声を掛けられたと言う。シスターは特に「鐘は鳴る会」と関わりはなかったが、月一回集まる相談会だと知っておられ、紹介して下さったのだった。母親はこの娘の他に息子が一人居り、その子がまだ幼いころに夫と離婚して、今まで二十年余りの間、苦勞しながら二人を育ててきたようだった。娘は学校を卒業して就職し自立して生活していたが、母親の言動が心配で、傍らにいて支えなければならぬと考え、二人は共依存のような状態に陥ってしまっていた。息子の方は、小さい時から大事に育てられながら反抗的で暴力を振り、母親は生傷が絶えることがなかった。成人しても母親に対して暴力的言動が多く、怖ろしい存在ながら離すことができずに一緒に暮らしているという。詳しいことはわからないが母子を一緒にしておくのはよくないというカウンセラーの先生のご判断もあり、母親の方は私たちが引き受けて考えていこうということになった。集まっていた人たちの意見は、自分たちと同じようにカウンセリングを受けながら話し合いを重ねるのがよいというもの、教会を頼ってきたのだから神父様にお話ししていただくのがよいのではないかとする二つに分かれた。結局神父様にご指導をお願いすることに決まった。これが彼女との関わりの始まりだった。

彼女は苦勞して育て上げたこともあって子どもから離れることができず、特に生活を共にしていた息子とは離れて暮らすのが難しかった。しばらくテレサの家で過ごしてもらうことにして、その間に息子には住み込みの仕事を探して家を出てもらうことを考えた。夏の終わりから一月余りテレサの家に来て過ごしたが、息子がちゃんと仕事をしているかど

うか（息子は新聞販売所に勤めていた）気になって家に電話して確かめたり、電話が通じないことを心配したりして落ち着かなかった。テレサの家の辺りは冬の訪れが早く、寒さを感じるようになると暖かい自分の家に帰りたいが、息子の問題が片付かないまま家に帰って、元の生活に戻ってしまった。その後息子は仕事を見付けて家を出たが、ときどき帰宅しては母親に暴力的な態度を取るなど、解決の糸口はなかなか見付からなかった。

教会の神父様との出会いは大変よいものだった。神父様は聖書の話やカトリック要理など教え始められ、彼女は喜んでお話を伺いに通っていた。神父様はご高齢でお体も少し不自由でいらしたが、よく気を遣ってお茶を入れたりお好きなお菓子を差し上げたりする彼女がすっかり気に入られ、洗礼に向けて教えておいでのようだった。2008年2月一応の勉強を終えて洗礼を受けることが決まった。神父様はお体が弱ってこられ、これが最後の洗礼式となった。ボラ連のスタッフや周りの友人たちも喜んでお祝いに集まり、教会の信徒として彼女を受け入れた。

娘は、母親に対する気遣いの他は特に問題なく、自立して生活を続けていた。幸い大学を卒業して就職が決まっている人との結婚話が進み、広島を離れた生活の場が与えられた。二人は信徒ではないが、スタッフの勧めもあって、準備された教会で結婚式を挙げる事ができた。母親はこの結婚に異議はなかったが、心情的に娘を手離すことが受け入れられなかった。教会には新郎の親族や二人の友人たちも集まって華やかに式は行われたが、



母親は教会に足を運びながら式には出席せず、控え室でスタッフに見守られて休んでいた。若い二人は人々に祝福されて式を終り、広島から遠く離れた新居に落ち着いた。その後も母娘の間でいろいろあったようだが、これを機に二人の縁は切れてしまっている。

彼女に洗礼を授けた後、しばらくして神父様は帰天された。その葬儀や納骨には顔を出したものの、教会にはあまり馴染めずにいたようだった。ただ神父様のことは大変敬慕していて、ときどきお花を沢山抱えては墓参りに行っていた。墓地に行くとき心が静まり、神父様のお導きを有り難く思い返して過ごしていた。

人の中に入ると過呼吸を起こしたり言語障害になったりして、バスや電車にも乗れず、月一回病院に通って薬を常用していた。自分の暮らしのために細々と仕事を続けていたがどれも長続きせず、次第に体力が弱って働くのを辞めてしまった。弁護士さんを交えて生活保護を受けることを勧めたが、その頃また同居に戻っていた息子の存在がネックになってなかなか進まなかった。息子には期限を切って家を出るように勧めたが、聞き入れず家に居座っていた。或る朝突然姿を消して行方が分からなくなってしまった。後になって遠く離れた土地でよい人に出会い、仕事もみつかって元気に過ごしていることが分かり安心した。彼女は生活保護を受けることによって生活も安定した。障害者手当も出てヘルパーに来てもらい、

一人暮らしにも慣れていったようだった。

現在はテレサの家で月一回行われている「暮らしを考える野のゆり会」の仕



事を手伝っている。前の月の配達のために使った容器の整理や保冷剤の確保、仕事場の掃除などして、配達の商品の仕分けに集まるボランティアが働き易いように準備してくれ、次週には皆が配達に出た後の片づけのため、前夜泊って使った寝具の洗濯や炊事場の整理、家の掃除などして、この家を皆が気持ちよく使えるように協力してくれている。

年齢は私とは親子ほども違い娘のような存在だが——実際、私のことを“お母さん”と呼んで母の日などにはプレゼントを贈ってくれる。これは洗礼の時に代母をしたからだと思うが——病気のために最愛の子どもたちと別れなければならなかった不幸は、一緒に歩いていくことで少しでも埋めていきたいと思う。いつかお互いの気持ちが解け合って、再び母子として生きていけるように祈っている。

8

2000年4月1日にオープンした「夢の郷・テレサの家」は、マザー・テレサの「痛む愛」に倣って居場所のない人に憩いと安らぎの場を提供していこうというものだが、オープン当初からこの家を管理する人に住んでもらいたいと考えていた。通常無人にして置くのは、この山里に住む近所の人たちとの交流にも問題があり、理想的なこの土地に少しでも早く馴染んでいけたらという思いが強かった。しかし適任者はありながらも結局住み込むまでに至らず、毎月1度行う「暮らしを考える野のゆり会」の作業場として使う外は無人のまま過ごしていた。家そのものはフリースペース「こころの大部屋」や、「鐘は鳴る会」に集まる人々を中心に、居場所を失った時の「駆け込み宿」の役目を果たしてきた。また修道会の黙想の場、教会学校の合宿場、平和学習で広島を訪れる人たちの宿泊場など幾多の目的に使用され、豊かな自然を求めて訪問してくれる人も多かった。

2007年4月5日、待望の住み込む人を迎えることができた。家の周辺の桜はようやく三分咲きになった頃で、夕刻にはまだ寒さが残るような日だった。翠町教会のスタッフが以前から気にかけて探してくれていたものが、急に話が決まってこの家に居住することになったのだ。この人の母親は教会のオルガニストを務めた人で、その妹（叔母にあたる）はシス



ターということだった。彼自身も神父を目指して神学校に学んだ経験もあったが、神父にはならず各地で神父様方のお世話をしたり、一緒に働いたりした後、愛媛県の島で仕事をしていた。カトリック教会に縁の深い人でもあり、この家の管理を委せるのに最適な人と思われた。屋過ぎに初めて訪れてくれた時には、スタッフは家にいて仕事をしていたのだが、少し離れた畑の方に軽自動車を乗り入れて、直接家に来るのをためらっているような様子だった。スタッフは待ちに待った人の到来ということで、皆で歓迎した。

この家で行う「暮らしを考える野のゆり会」の仕事はそれまですべて手作業で、注文書作りから請求書、領収書の類まで手書きだった。彼が来てからはすぐにインターネット使用に切り換えて機械化することになり、NTTに電話工事を申し込んだ。工事の完成は4月18日になるとのことで、その間フリースペースの男性たちがこの家に集まって、夜桜見物を楽しみ、翌日には畑の作業をした後、近くで採れた山菜やラッキョウの花の天ぷらを作って食べたりして、次第に親しさを増していった。彼も早速この家に住むために必要なことを次々と備えていった。事務室から作業場に降りるステップの下の空き間からネコやイタチが入って困っていたのを、入れないように補修したり、敷地の南面にある側溝をきれいにして隣家に土砂が流れ込まないように仕切りを作ったり、燃料タンクに灯油を満たしたりと、それまで気になりながらも出来ずに過ごしていたことが整理されて、スタッフも助かった。

4月の「暮らしを考える野のゆり会」の仕事は、丁度配線工事が済んだところで、インターネットを使ってパソコンで集計や発注の作業を行った。それまでの半分の時間で済んでしまい、仕事が大変楽になった。二泊三日の作業も三日目には昼頃にテレサの家を発って早く帰宅できた。次週の仕分けと配達の仕事にも加わってくれて、スタッフはとても楽をしたが、本人は失敗が多くて皆に迷惑をかけてしまったと気にしていた。

5月に入って畑の仕事も一緒にするようになり、畑の土の整備などを

行ない、夕刻からは一緒に働いた男性たちと近くの山の温泉に行ってくつろいで過ごした。しかし、以前からこの畑で試みていた自然農法とは相容れないこともあって、調節がかなり難しかった。結局ほぼ150坪ある畑の土地を分けて、自然農法とは別に従来のやり方で作物をつくることになってしまった。また、テレサの家の生き方を理解するのにかなりの時間が必要だった。相手の立場を理解し尊重し合って仕事は自主的に行うこと、マザー・テレサの「痛む愛」の実践に努めて祈りを大切にすること、豊かな自然の恵みの中で互いに力を出し合って共同作業をしていくことなどがしっくりこない様子で、上からの命令に従って作業することが求められると考えると自主的に動かなかったり、微力の人を見下すような態度を取ったりする様子が見られ、スタッフが心を痛めるようなことが度々あった。この家の管理を委せるにはふさわしい人と思えず、共同作業をしていくには向かない面があるようで、同じ思いを分かち合って生きていくのが無理と思われるのは残念なことだった。日常の仕事として勤め先も決まり、向学心も旺盛で放送大学で得意な学科を学んだり、隣家のネコを可愛がったり、この家の事務的な仕事はきちんとこなし、外回りもきれいに整えて植木の世話もしている。10年の時を経た今では、時に問題行動がみられるものの、この家の一人としてここに住み込んで働いてくれている。

テレサの家がオープンしてから10年目を迎えた年、この節目を機会に今までの活動をさらに発展させ、良いものに改善してもっと多くの人々に利用していただけるようにと考えると、NPO 法人設立を目指すことになった。

2010年2月8日に初めて準備会を開いた。出席者は3名で、テレサの家を始めたスタッフ2名ともう1人大切な協力者に加わってもらった。この人はテレサの家の宝ともなっているマザー・テレサの言葉を揮毫して寄贈して下さった書道家の義兄に当たり、奥様と共にこの家を設立するのに力を貸して下さった。

数年前からは広島を離れて山口県の周防大島に居を移し、「暮らしを考える野のゆり会」で扱う商品として島の産物を紹介したり、月々の配達を手伝ってくれたりしていた。元は出版業を手がけておられ、事務的な仕事にも秀でていて、スタッフにとってもまたとない協力者だった。準備会は4月3日まで計6回行い、2010年4月11日に設立総会を開くことができた。

法人の目的として、現代社会の中に居場所を失ってしまった人々を、その人にふさわしい社会生活を見出すための支援を行うと共に、食品や環境の安全を守るための生産や頒布を通して、社会の福祉と生活改善を計ることに置き、次の事業の実現を考えた。

1. ひきこもりの人たちの交流の場づくり
(フリースペース)
2. 高齢者等のためのグループホーム運営
3. 憩いと癒しの場の提供と生活相談
(テレサの家)
4. 社会に順応困難な人の就労支援のため宅配等の仕事を提供する
(暮らしを考える野のゆり会)
5. 無農薬の農作物等を生産・加工する作業
(テレサの畑)

入会金1000円、年会費5000円を会員から徴収し、法人の活動に充てることとなった。

設立総会の出席者が17名で、遠く滋賀県の大萩茗荷(みょうが)村から駆け付けてくれた人、周防大島から資料をまとめて持参してくれた人、東広島から参加して議事録の署名人になってくれた人、岩国から小さい子供を連れて夫婦で出席してくれた人、など皆の協力のおかげで無事に終了し、NPO法人「夢の郷・テレサの家」として設立が承認された。理事に選ばれた一人の「マザー・テレサの言葉に倣うという基本理念を大切にして、この事業の目的が時を経て曖昧にならないように努めるこ

と」という発言が何よりも会員たちの心に響くものだった。設立当初の会の財産についても、いくつかの質疑があったが、満場一致で承認された。活動の性格上、どうしても寄付が頼りになってしまうが、その後、会員も20名に増え、賛助会員3名と共に会の発展を支えてくれている。



9

テレサの家がオープンして10年目を迎えた2010年の8月25日、NPO（特定非営利活動）法人「夢の郷・テレサの家」の設立が承認された。現代社会の中で居場所を失くしてしまった人々が、その人にふさわしい社会生活を見出すための支援を行うと共に、食品と環境の安全を守る生産・頒布の仕事を共に行ない、それらを通して社会の福祉や生活の改善を計ることを目的とし、その実現のために以前からの事業を引き続き行なうことになった。具体的には、ひきこもりの人たちの交流の場であるフリースペースの運営、憩いと癒しの場の提供と生活相談を行うテレサの家の活動、無農薬の農作物の生産と加工をするテレサの畠の作業などが挙げられる。中でも「暮らしを考える野のゆり会」の仕事は、フリースペースに集まる人たちと共に、体によい商品を仕入れて希望者に宅配するというもので、NPO 法人活動の中心になった。

この活動は、今までの10年間に協力して下さる方々も増えている実績もあって、これを継続していくことに力を入れた。月一回の仕事だが、教会のボランティアの人たち（NPO 法人の会員）4、5名が手伝いに来られる他は、注文書作りから仕分けの荷作り、配達の仕事などスタッフと一緒に中心になって働いてくれる人が、フリースペースの中から育ってきている。スタッフがいなくても充分責任をもって仕事を進めてくれるので進行も早く、一日の仕事が順



序良く片付いていくのはとても有り難い。長年一緒に仕事に携わり内容もよく理解してくれている若い人に、そろそろバトンタッチしていけたらよいと考えている。テレサの家で大切にしている“祈り、憩い、そして働く”という姿勢がしっかり受け継がれていくことを心から願いながら…。

この法人活動を始めてみてまず困ったことは、今まで何の隔たりもなく一緒に活動してきた人たちを、提供者（会員）と受給者（非会員）に分けなければならないことだった。会員は入会金1000円と年間会費として5000円を納めることに決まっているが、フリースペースに集まる人たちから会費を徴収するわけにはいかない。むしろ一緒に働いてくれる人たちには、わずかながらもアルバイト代や車のガソリン代などは会の方から支給していた。雇用者と被雇用者という立場の違いを超えて、お互いに来ることをその人の能力に応じて行ってきたものが、はっきり区別がついてしまうのは心外なことだった。法人資格を取ったからといって今までと違った接し方は考えられない。結局以前と変わりなく仕事をしていたが、外部と接触するときはかなり抵抗があった。法人格は確かに世間からの信用は得られるし便利な面もあるが、活動をしていく上には相容れないものが感じられた。法人化して6年が過ぎた今では法人からの脱退も考えている。書類上の規制ばかりが多く、メリットはあるものの、続けるのは負担になるばかりだと思われるからだ。

NPO法人「夢の郷・テレサの家」として一つ大きな活動ができたことはよかったと思っている。それは、福島の子供たちを広島と山口に招く夏休みの保養キャンプ「金魚島げんきっ子クラブ」というプロジェクトを立ち上げたことだ。2011年3月11日の東日本大震災に伴う原発事故によって、福島県の人たちは避難生活を余儀なくされ、子どもたちも不自由な生活を強いられた。せめて夏のひと時を放射能の心配がない広い空や海の下で思い切りのびのびと過ごしてもらいたい思いで、福島・滋賀・広島・山口など各地の復興支援を望むグループが一つの絆で結ばれ

保養キャンプが実現した。2012年7月25日から8月3日までの10日間を山口県周防大島で過ごしてもらうことになり、20人の子ども（小4以上中2まで）を受け入れた。周防大島では島を挙げての大歓迎で、ボランティア100名以上が協力して海での遊びを提供してくれた。



周防大島は瀬戸内海に浮ぶ島の中でも大きなものの一つで、本土とは山口県柳井市大島から大島大橋でつながっているの、渡るのに船はならず、便利なところ。島全体が金魚の形に似ているので金魚島と呼ばれている。気候は温暖で住み易く、柑橘類がよく育ってお魚もおいしい。長く島に住みついているお年寄りも多いが、近頃は遠くから移り住んだ若い人たちも増えている。いかだづくりやカヌー漕ぎ、舟で沖まで出て魚釣りをし、釣った魚は自分たちで料理して夕食にいただいた。食事は地元の女性たちが手作りでもてなしてくれ、お米や果物の差し入れも多かった。その他、地元の子供たちと交流して音楽会、運動会など盛り沢山の日程が組まれた。

その中の一日、7月29日平和学習で広島に行くことになった。朝バスで島を発って広島に向かい、広島のカテドラル世界平和記念聖堂で祈りを捧げ、神父様のお話を聞いた。また、聖堂を見学して戦後に世界各国の援助によって建てられたものであることを学んだ。広島での平和学習については、放射能被害に遭っている子どもたちに、広島での惨状をなぜ見せるのかとの意見もあったが、過去の戦争のことを学び、焼け野原になったこの土地が今では立派に復興している姿を見てもらい、ともに祈り考えたいと思ったからだ。同じ放射能の被害に遭った者として、これか

らの平和について考えて欲しいという気持ちが強かった。子どもたち自身の中からも、平和公園や原爆ドーム、碑巡りなどをしてみたいとの意見があり、原爆資料館の見学は時間が短か過ぎてもの足りなかったと言う子どもさえあった。島に戻る帰りのバスの中で子どもたちに聞いてみると、戦争のことをよく考えてきちんと受け止めていることが分かり、よかったと安心した。翌日の読み聞かせの時間では、身近な体験を通して平和を考える本を読んだり、原爆被災者の話を直接聞くこともできた。同じ放射能の被害に遭った者として、これからの平和について考えて欲しいと思う。

2年目からは周防大島で過ごす時間を少し減らし、広島市西区にある行者山太光寺（ぎょうじゃやま たいこうじ）に宿泊して広島での平和学習を行い、後半3日間を大島の海遊びに当てることになった。太光寺にはよく整備された宿泊施設があって十数名を受け入れて下さった。お寺での宿泊はしきたりに則った厳しいもので、早朝から座禅と講話がある。朝食はおかゆと梅干と漬物などのわずかなお菜、禅の作法に従って使った食器はお茶で清めて各自の場所に納めるなど、子どもたちには未経験なことばかりだった。おかゆなど食べたことのない子や漬物を毛嫌いして食べられないと泣き出してしまう子もあったが、お坊様の適切なご指導のおかげで何とか無事に過ごすことができた。

5年間は続ける予定で始めたプロジェクトだったが、福島的事情が次第に変わって来て、5年目には参加する子どもを集めることが難しくなり、「げんきっ子クラブ」は4回で終わることになった。5回目の計画をするために集まったスタッフは、福島と結ばれた絆が切れてしまうことを残念に思い、このまま終えてよいのかとの想いが自然にこみ上げてきた。

この一年ほどの間に、国も社会も福島の人たちの保養という言葉を口にしなくなり、医者も研究者も放射能の危険性を語らなくなった。しかし、原発事故による放射能は自然の中に現に存在して生物に悪影響を与

え続けている。保養と治療を支援するサナトリウムを広島に作りたいという希望も生まれ始めていた。福島の子供たちが4年間の夏休みを過ごした周防大島に、築85年になるバプテスト教会が隣接した幼稚園と共に閉館されることになっていたが、サナトリウムとして使うなら譲ってもよいというお話があった。ここを福島の人たちが家族ぐるみで訪れて使ってもらえたらと、スタッフはその実現を真剣に考え始めた。



周防大島は金魚の形をした金魚島

10

周防大島の安下庄（アゲノショウ）にキリスト教プロテスタントのバプテスト教会があり、教会の入口上部に「福音丸記念會堂」と文字が刻まれている。1909（明治42）年6月6日に「安下庄福音丸講義所」として開設された施設である。福音丸は明治時代の中頃キリストの福音を告げるために作られた伝道船で、船長はルカ・ピッケルと言う。20年もの間この船に寝泊まりしながら瀬戸内海の島々を巡り、布教に生涯を捧げたという伝説的な人物である。1902（明治35）年、福音丸は瀬戸内海の青い海原に2つの大きな白い帆を掲げて安下庄に入港した。島の人々はこの船を「瀬戸の白鳥」と呼んで歓迎した。港の近くの家々は集会のために提供され、集まった人々はピッケル船長や同行の宣教師の説教を熱心に聞き入った。人々は群がって家からはみ出し、外の塀の所までいっぱいになるほどの盛況ぶりだったと記録に残っている。

明治の終りに役目を果たし終えた福音丸は売却され、そのお金で瀬戸内海伝道の拠点となる5つの島が選ばれて教会建設が行われた。その一つが周防大島安下庄の教会で、他の4つの教会は老朽化して建て替えられたが、ここだけは教会として残された。1932（昭和7）年10月に現在の「安下庄バプテスト教会」が設立され献堂式が行われた。2014（平成26）年まで教会として使われ、聖堂の祭壇裏には洗礼に使われる浸礼槽が残っている。棟続きの「博愛おさ



なご学園」は1910（明治43）年に「安下庄博愛遊戯園」という名で開園された施設で、近隣の子どもたちが幼稚園として通っていたが、少子化の影響もあって2001（平成13）年3月に閉園となった。安下庄にはこの園の出身者が多く、成人して島を離れた人々もなつかしい思い出の場所として、帰郷のたびに訪れたり祈りを捧げに来ているという。

数年前からこの島に居を移したNPO法人「夢の郷・テレサの家」のスタッフの一人が、島の中にはカトリック教会がなく、日曜毎に対岸のカトリック教会（光か柳井）に通うことが無理だったため、この教会の礼拝に参加していた。地元の信者たちも来ていたが人数は多くなく、熱心に通うスタッフは教会の牧師様ともすっかり親しくなっていた。近々この教会を閉じて東京の方に戻られるとの話があり、築85年という古い教会ではあるが、しっかりした建物でこのまま廃館にしてしまうのはいかにも惜しいと思われた。

丁度その頃、夏休みの保養地として周防大島を使うことは、福島事情から無理な状況になり、「金魚島元気っ子クラブ」の存続をあきらめることになってしまった。福島と結ばれた絆を切りたくない、せめて広島に支援のサナトリウムでも作れたらと思っていたスタッフたちは、この教会の建物を譲り受けて使えないかと考えた。島の文化的中心地とも言えるよい場所で、土地650㎡強とその中に建つ家屋400㎡を500万円で譲ってもよい、但し教会の跡にふさわしく祈りの場として使って欲しいとの条件付きのお申し出があった。「テレサの家」の予備費として以前から積み立てていた費用500万円程が手元にあったので、これを充てることにして話を進めていった。

2016（平成28）年3月8日、この周防大島安下庄バプテスト教会は、私どもの手に渡ることになった。この日は珍しく暖かな春の気配に恵まれた中、柳井市の銀行に赴いて、東京から来られた牧師様のお手を通して、宗教法人バプテスト同盟から購入し、登記を済ませた。事務手続きがすべて終わった後、柳井から大島大橋を渡って新しく手に入れたこの

教会を見に行ったら。教会堂前の庭にあるミモザの大樹が輝くばかりの黄色の花を見事に咲かせていた。イタリアでは3月8日を「ミモザの日」と呼んで、女性の記念日として祝うという。男性は日頃の感謝を込めて母親や奥さんに、また女性同士でも互いにミモザの花を贈り合う習慣があるそうだ。春の象徴カラーである黄色の花は、暖かい春の訪れを知らせる幸せの花とされている。美しく咲き揃って私どもを迎えてくれたミモザをこの家のシンボルツリーにしようと思った。

教会の建物は礼拝所として使われていた時のままで、隣接した幼稚園も園児が使用していた小さな机や椅子、トイレなどがそのままの姿で残っていた。ここを改造して寝泊まりできる宿泊所とし、キッチンや食堂も作って家族で過ごせる場所にしたい。室内デザイナーにも加わってもらって間取りを決め、浴室やトイレを新しく作り直した。5月から工務店の人が仕事に入って、暑い夏の日も休まずに仕事を続けてくれたおかげで、年内には大方出来上がり今年に入って内装を整えた。聖堂には広島市の翠町教会から頂いた十字架を掲げ、「主の祈り」の額や松本治子さんの絵「カテドラル」の他、「母子像」など3点で壁を飾った。寄贈された本が沢山集まり作り付けの本棚も作った。テーブルと椅子のセットは某大学の保健室のものを譲り受けて並べた。宿泊所には子どもたちが多人数でも泊まれるように考えて、吊りベッドを天井近くに設けた。使いやすいキッチンと食器棚、その横に食卓と椅子を置いて食事を楽しむことができるようにした。その辺りの雰囲気は、テレサ



おさなご学園の入り口にある大きな桜の木が見事に花を咲かせた。

は昼食交流会に移り、庭の桜の樹の下にテーブルや椅子を並べて、前日から用意にかかった蛸めしや豚汁など盛り沢山のご馳走がふるまわれた。広島から出張して唐揚げやサンドイッチ、ケーキなどを作ってくれた助っ人もあって、おいしくて楽しい昼食会となった。近隣の人たちも加わって音楽演奏やフラダンスなどの余興も楽しかった。最後は大雨に見舞われたが、皆満足して家路に着くことができた。

2000年に「テレサの家」を始めて以来17年もの年月がいつの間にか過ぎてしまった。スタッフもそれなりに年を重ねて仕事も思うようになくなり、若い世代への引き継ぎを考える頃となった。フリースペースの中に、ずっと一緒に仕事を続け順調に成長してくれた人もあり、後を託すのに不安がない状態になっているのは有り難いことだ。そんなかわりの中で、周囲の人たちから助けられていることを強く感じずにはいられない。特に神の愛に包まれて仕事を続けてこられたことを痛感している。行き詰まった時、問題が起った時にも、不思議に解決の糸口が与えられた。神の心にかなうことでなければいつでもやめようと話し合ってきたスタッフたちも、守られていることを強く感じているに違いない。周防大島に新しい拠点ができ、更に仕事は広がっていくだろうが、“祈り、憩い、そして働く”という初心を忘れずに末長く続く活動として引き継いでほしいと心から願っている。(了)



NCK 通信96号から106号の表紙を飾った松本治子さんの絵が3枚掲げられている。

夢の郷 テレサの家

【初出】NCK Newsletter 日本カテキスタ会 118—127号、
2015年春-2017年夏まで10回連載

■略歴

稲賀久美子（いなが・くみこ）

1931（昭和6）年2月22日誕生

幼少を現在の法政大学・能楽研究所の所在地にあった実家で過ごす。両親は滝澤高彌・八重子。8人兄弟姉妹の次女として、神奈川県中郡二宮町で育つ。日本女子大卒業。宮内庁書陵部に勤務。1955（昭和30）年、稲賀敬二に嫁す。1957（昭和32）年、長男・繁美誕生。同年、夫の広島大学赴任にともない、広島に転居。息子の小学校入学後、山陽女子高校および短大に奉職し、長年にわたり、講師として国語の教鞭を取った。「古江ママさんコーラス」おって改名して「広島女声合唱団」に参加。レパートリーはアルト。ピアノ演奏、英文タイプ、習字、切り紙絵、布の造花作りなどにも趣味を広げた。息子の大学進学後、カトリック受洗。未年にちなみ、洗礼名はアグネス。観音町教会に属し、聖書研究会、広島宗教音楽研究会などに所属。1981（昭和56）年には、広島は教皇ヨハネス＝パウロ二世の来訪を迎えた。2001（平成13）年4月11日に夫と死別。2020（令和2）年より自宅近くの介護付有料老人ホームに入所。現在に至る。

夢の郷 テレサの家 追憶断片

2022年2月22日校了、同4月11日発行 私家版

著 者 稲賀久美子

発行者 稲賀 繁美

615-8026 京都市西京区桂市ノ前町119
ネヴァーランド桂708

印刷・製本 宇野印刷

606-8357 京都市下京区黒門通五条入ル
